

## 認識から体験へ グノーシス主義の変容？

大 貫 隆

### I H. Jonas の所説

- 1 Gnosis und spätantiker Geist, Bd.I: Die mythologische Gnosis, Göttingen 1934, 3.Aufl 1964 (FRLANT 51); Bd. II,1: Von der Mythologie zur mystischen Philosophie, 1954 (FRLANT 63), 2. Aufl. 1966; Bd. II,1 und 2, hrsg.v. K. Rudolph, 1993 (FRLANT 159). その内特に Bd. II,1, 122-170 (4. Kap.).
- 2 神話論的グノーシスが与える「認識」は、主体と客体を分離させた「思弁」と「表象」次元のもの。その分離を超越して、実行と事柄を統合することができない。目的と手段が互いに「外的」な関係。(128f)
- 3 神話は「これがお前だ」と示す。「それゆえ、覚醒を呼びかけ、かつ教示する『よびかけ』は神話を伝えることそれ自体に他ならない。(中略) だから、それを理論的に自分のものとする、それがもたらす知識を固持することが、もうそれ自体で、闇のような在り方を実際的に止揚するのである。その闇の状態が無知と無知の産物に外ならないのであれば、すでに神話がそれを説明することによって、それを縮減しているのである。」(151)
- 4 しかし、その覚醒の瞬間に人間はそのように示されたものから引き離されて、神話的な媒体に連れてゆかれる。実行する主体として人間が神話の客体性から隔てられている距離が止揚されない。(143f)
- 5 主体と客体の一体性は、「存在」次元でのみ可能。この次元の移動が神話から哲学へ、さらには神秘主義 (Mystik) への移行。神話の思弁的、事物的言語が存在論的概念へ「非事物化」、「合理化」される。(165)
- 6 「いつでも再現可能な、存在の純粋な内在的法則」。プロティノス II 9,4 : 「いったいいつ万有靈魂 (=ソフィア) は過失を犯したというのか」(166f)
- 7 この移行で神話論的グノーシスは、神話的な客体性とその充満を失った。しかし、「構造的なもの」(階層構造、落下あるいは降下運動、存在の頂点の無世界的な否定性、『魂』のこの世性) は保持された。(166f)

### II 二つの疑義

- 1 Jonas の言う「体験」、「経験」は意識レベル。「私にとっての実行可能性」。しかし、大貫『グノーシス「妬み」の政治学』p.161 : 「神話が語る啓示は神話のテキストとして到来する。」(=前記 I,3 参照) →深層動態的統合 : 「気がついてみたら、そうになっていたということ」(Jonas も「実際的に止揚」)。
- 2 前記 I,7 に対して。ヴァレンティノス派は、グノーシス神話の最重要なトポス「ソフィアの過失」と「造物神による可視的世界の創造」について、その構造上の位置価値も、中期(新)プラトン主義に添う方向へ変更 : プトレマイオスの神話(エイレナイオス『異端反駁』I,2,2; 5,3) →『三部の教え』(NHC I,5, § 24) →『ゾーストリアノス』(NHC VIII,1, 私訳 § 19,57,121,124,129,133)

### III 『ゾーストリアノス』(NHC VIII,1)

- 1 「私にとっての実行可能性」が最大のポイント →文学的な様式に明瞭。
- 2 「見る」と「聞く(聴く)」の語彙が増大。特に「聞く」と「声」: § 47-55,74,90,170
- 3 「私」の「体験」(忘我境での魂の上昇)は下から上方へ。ただし、至高の領

域の手前で終了する。

- 4 その構造はすでに初期ユダヤ教(+キリスト教)文書に多数の並行例があるが、それぞれの階梯で魂が「見る」+「聞く」中身は異なる →「神話」。
- 5 「神話」は上方から下方へ、解釈天使によって仲介される。「神話」というよりは「存在論」。新プラトン主義 (Plotin, Marius Victorinus 『アリウス反駁』) の存在論を明瞭に意識し、利用。→「存在」+「至福」+「生命」//「存在」(オン、ヒュパルクシス)+「叡智」(ヌース)+「生命」(プシュケー)。
- 6 グノーシス神話と哲学の統合の試み。神話の「いつかどこかで」から哲学の「いつでもどこでも」へ。

#### IV 結び

- 1 神話論的グノーシスの側からの哲学的グノーシス(神秘主義)への大幅な歩み寄り。しかし、プロティノスは拒絶(II,9「グノーシス派に対して」)。
- 2 道はどこで別れるのか？